

豊川海軍工しよう

小・5 大井 璃鳳

ウー——

午前十時三十分、町内のサイレンが鳴った。

「みんなでもくとうしようね。」

とお母さんが言ったので、ぼくは目をつむって手を合わせました。七十八年前の今日、八月七日は、東洋一と言われた豊川海軍工しようにぼくだんが落ちた日です。

ぼくはの家では、毎年このサイレンが鳴るとみんなでもくとうをしています。小さいときは、何をしているのかわからなかったけど、小学生になってからお母さんに、「何でこんなことするの」ときいたことがあります。そしたら、昔日本は戦争をしていて、ぼくが住んでいる豊川市には大きな軍の施設があったこと。そのしせつでは、じゅうだんや戦争で必要なものを作っていたから、てきの飛行機が来て、たくさんぼくだんを落として、働いていた人たちがぎせいになってしまったこと。その人たちが、天国に行けるように、そして二度と繰り返さないように願いをこめて、おいのりをするということを教えてもらいました。今世界では、戦争をしている国もあります。戦争という言葉は知っているけど、なかなかピンときません。日本でも七十八年も前の話です。

「なんで戦争なんてするんだろう。」「平和って何だろう。」とぼくは思いました。戦争なんていいことないし、みんなが悲しむだけなのに、なぜするんだろう。しかも自分の街にぼくだんが落ちたなん

て信じられません。

戦争について知るために、まず、自分が住んでいる豊川市にあった豊川海軍工しようの空しゅうから調べてみようと思いました。そのことを伝えたらお父さんとお母さんが、桜ヶ丘ミュージアムで開きされている豊川海軍工しようてんに連れて行ってくれました。しせつの中には、手紙やいりゅう品などがあってだん薬も置いてありました。

てん示品の中には、海軍工しように落とされたぼくだんのも型が置いてあって、ぼくの背よりも大きい五百ポンド（二百五十^{kg}）ぼくだんです。おこんなに大きなぼくだんがわずか二十六分間の間に三千二百五十六発、重さにすると約八百トンが落とされ、二千五百人以上の人がぎせいになりました。雨のようにぼくだんが落ちていく映像を見て、ぼくはびつくりして何も言えなくなりました。こんなことが本当にあった人だと信じられませんでした。

その後、海軍工しようのあと地にできた豊川海軍工しよう平和公園に連れて行ってくれました。まず、目に入っただけは大きな土がカベみたいになっている場所です。階段があつて登ると、下には何か建物がありました。下においてのぞいてみると、ここはじゅうのたまを作っている場所でした。なぜ周りが土のかべで囲まれていたのかというと、つくっている最中にぼくはついても周りにひ害がおよばないようにするために、この作りになっていそうです。となりに小さなトンネルがあつて、そこを通ったら、ぼくと同じくらいの足あとらしきものがありました。お母さんの足と比べてみたけど、やはり足あとの方が小さいです。ぼくの足と比べてみると、ぴったりでした。その時、

「りおと同じくらいの子が出入りしていたのかもね。」

と、お父さんが言いました。そのしゅん間、ぼくはぞくつとして、「今このしゅん間、ぼくさんが落ちてきたら、」と、考えていました。次は、ぼくさん庫を見に行きました。とても大きくて、しつ気でぼくさんが使えなくならないために、床にも空気が通るように作られていました。館内には、い品がてん示してあって、とても残くな説明が書かれているものもありました。それを見ていたお父さんが、

「おばあちゃんがここで働いていたんだよな。」と言いました。七十八年も昔のことだと思っていたけど、お父さんのおばあちゃんは戦争を経験しているんだと、びっくりしました。その中でも、ぼくが印象に残ったものがあります。それは、入ってすぐのところに書いてあった「あと八日早かったら・・・」という言葉です。気になって調べてみると、空しゅうがあつた八月七日の八日後の八月十五日に終戦、八年という長い戦争が終わった。あと八日早く戦争が終わっていたら、助かった人がたくさんいたんだろうなと思うと、ぼくはとても悲しくなりました。

戦争はみんなを悲しませるし、絶対にしてはいけないことだと思います。最初は、七十八年も前という印象だったけど、まだ七十八年しか経っていません。ずい分昔の話と思つたけど、まだこの空しゅうを経験した人から話が聞けるし、二度と同じ過ちをくり返さないように、自分たちがこれから語りついでいかないといけないと思いました。世界でもまだ戦争をしているところもあります。華族や友達、大事な人が笑顔でいられるそんな幸せな世界が早くおとずれるといいなと思います。